

エコタウン事業に沸き立つ瀬戸内

なおしま

「直島」



三菱マテリアル(株)直島製錬所の全景

高松港を出発し、直島の宮浦港へと向かう。フェリーのデッキから島々を眺めた。温暖な気候で知られる瀬戸内だが、一月の海風はさすがに冷たい。寒風を切つて進むフェリーに、人なつこいカモメ達が併飛行する。右手には桃太郎の鬼ヶ島に例えられる女木島、左手には瀬戸大橋の優美な姿。瀬戸内の大パノラマがゆつくりと角度を変えながら視界に入り込み、後方へと流れていく…。

「直島」の名の由来は十二世紀にさかのぼる。保元の乱(二五六年)の後、崇徳上皇が讃岐に流される途中この島に立ち寄りられ、島民の純朴さをめでて「直島」と名付けられたと伝わる。地理的には岡山県にほど近く、島の人達の生活圏は岡山だ。しかし行政が香川県であるためか、昔ながらの讃岐の文化が今も色濃く残っている。

直島発、芸術・文化の波

直島町は大小二十七の島々からなる群島の町で、その中心が面積八・五km²、周囲十七kmの直島である。島の人の話に「ハマチ御殿」という言葉が出てくる。聞けば、直島は海苔とハマチの養殖が盛んで、成功した漁師の立派な家をそう呼ぶらしい。なるほど、島の沿岸を車で走ってみると、あちこちに養殖場が点在している。

島の南方には、モンゴルの遊牧民が生活するパオ型テントやドイツの家型テントなどが張られている。直島国際キャンプ場だ。夏は本州からも若者が大勢集まり賑わいを見せるリゾートスポットである。隣接して、本格リゾートホテル「ベネッセハウス」がある。瀬戸内の穏やかな風景にとけ込む佇まいは、世界的な建築家・安藤忠雄氏の手によるもの。日本であることを忘れてしまいそうな建物の雰囲気は、建築に精通していない人でも一見の価値はあるだろう。

建築と言えはもう一つ、「直島家プロジェクト」もおもしろい。現代美術のアーティスト達が、古い民家の中で作品を制作したり、建物をま



直島・家プロジェクトのまったく窓のない「南寺」



世界的な建築家・安藤忠雄氏の手かけたベネッセハウス



濱田孝夫町長



緑青色の銅屋根が美しい直島町庁舎

環境リサイクルの

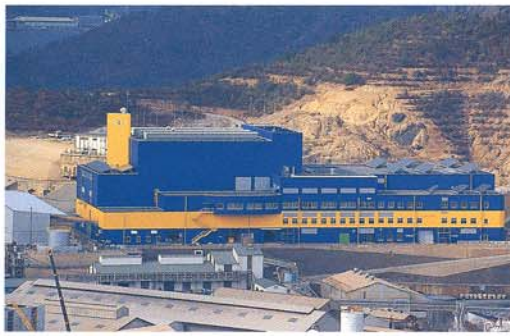
先進地をめざして

直島を語る上で欠くことができないのが、三菱マテリアル(株)直島製錬所だ。大正六年、三菱合資会社により三菱の中央製錬所として設立。以来、直島は製錬所と共に栄えてきたと言っても過言ではない。

「島民の約七割が、製錬所の関係者です」



三菱連続製銅炉。地球にやさしく、経済的な銅製錬法として世界中から注目を集めている。



豊島産業廃棄物の中間処理施設



三菱マテリアルが推進するリサイクル工場

と直島町長の濱田孝夫氏。直島町の人口は、三十年ほど前には八千人近くいたが、現在では約三千六百人に半減している。時代の流れとは言え、住民の島離れは町にとって深刻な問題である。そんな中で、あの豊島の産業廃棄物問題がクローズアップされた。

直島の東方五kmの沖合に浮かぶ豊島。ここに不法投棄された産業廃棄物が招く環境問題、そして瀬戸内全体のイメージダウン。「何とかしなければ」と、香川県と直島町が立ち上がった。

「直島には三菱マテリアルの製錬所と世界屈指の製錬技術があります。これを活用して、豊島の産廃問題の解決に二役買おうと、一大プロジェクトが始動しました」

直島製錬所の敷地内にあるへ豊島産業廃棄物等中間処理施設はこの四月に完成する。夏には本格稼働を迎え、豊島の産業廃棄物を無害化処理し、発生する溶融飛灰は製錬所で再資源化されることになる。この施設は香川県のものだが、同じ敷地内にもうひとつリサイクル工場が急ピッチで建設されている。こちらは、三菱マテリアルが推進するプロジェクトで、廃棄自動車のシュレッダーダストなどを回収し、再資源化するための施設だ。

この二つの事業(エコタウン事業)に濱田町長は大きな期待を寄せている。「新しい雇用機会を生み、直島の活性化につながりますから。将来は、環境リサイクルの先進地として、全国から見学者が訪れるようなモデルにしたいと考えています」

廃棄物はゴミじゃない、

「都市鉱山」だ!

直島製錬所は、銅精鉱を処理して電気銅

を生産する「銅製錬部門」と、銅製錬の過程で産出されるスライムを処理して金・銀を生産する「貴金属部門」からなっている。金の生産量は日本一を誇る。

冬晴れの青空を背景にそびえ立つ紅白の煙突を見ながら正門をくぐると、所長の五十嵐壽彦氏と総務課長の菅原祥氏が迎えてくださった。

「あれが豊島の産業廃棄物を中間処理する施設です」。菅原課長が指し示す方を見ると、鮮やかな青色の建物が目に飛び込んできた。隣には、今年十一月の完成をめざして建設中のリサイクル工場が、その骨格を見せ始めている。来春には本格的稼働し、ここに瀬戸内全域から回収された廃棄自動車のシュレッダーダストなどが運び込まれてくるという。五十嵐所長によると、鉱石の原石に含まれている銅の量は1%弱にすぎないが、シュレッダーダストには、なんと3%も含まれているとのことだ。「自動車には、電気系統を中心に多くの銅が使われ、その使用比率は年々高まっています。ところが、廃棄処分された自動車から銅が回収されていないのが現状です」。これはもったいない話だ。「だから、われわれは破棄物の山はゴミではなく鉱山、都市鉱山だ



五十嵐壽彦所長



菅原祥総務課長

と位置づけ、再資源化する事業に着手したのです」

廃棄自動車を銅鉱石の代替品に変貌させる。この夢のような計画を実現するのが、同社の誇る銅製錬技術である。

「自溶炉ではなく、三菱法と呼んでいる独自の連続製銅炉を採用しています。銅製錬から粗銅の製造までを一貫して連続処理するので、設備がコンパクトで無公害、省エネ、低コストを実現しているんです」。また、通常は鉱石に含まれる鉄を除去するために硅砂を使うが、ここでは粗銅をつくる段階で石灰を使用している。転炉がないことも大きな特徴だ。

お話をうかがいながら、自慢の連続製銅炉の前にやってきた。三つの炉が連なる上手から、溶けた銅が樋を伝わって流れ出してくる。溶岩を連想させるオレンジ色の「銅の河」のほとばしりは、まるで直島のエコタウン事業にかけるエネルギーと重なり合うようだ。

島のあちこちに点在する芸術・文化の諸施設。そして、直島製錬所で展開されるエコ・プロジェクト。自然・文化・環境の三本柱で「瀬戸内から世界へ」羽ばたこうとする直島。これからが楽しみである。